

古代エジプト、末期王朝時代から プトレマイオス朝時代の単純埋葬に関する一考察

—ジェセル王階段ピラミッド西側を例として—

米山 由夏

Ancient Egyptian Simple Burials from the Late to Ptolemaic Period at the Western Area of the Step Pyramid of Djoser

Yuka YONEYAMA

本稿では、エジプト、サッカラ遺跡のジェセル王階段ピラミッド西側から出土した末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬を対象に分析および考察を行なった。当該期の単純埋葬は、どのような特徴があるのかという基本的な部分について、これまでまとめられていなかったことから、その特徴を明らかにすることを目的とした。分析および考察の結果、埋葬の軸線・頭位が複雑な様相を呈することや埋葬姿勢が時期によって変化することを確認することができた。また、埋葬方法において被葬者のなかでも若干の経済的差異がある可能性が考えられることも指摘できた。

キーワード：古代エジプト、単純埋葬、末期王朝時代、プトレマイオス朝時代

This paper focuses on simple burials from the Late to the Ptolemaic Period that were found in the western area of the Step Pyramid of Djoser in Saqqara, Egypt, in order to understand the characteristics of non-elite burials of the period. The analysis suggests that the west-east axis with western head orientation burials were most popular, while a small number of north-south axis with southern head orientation burials probably represent “mini-traditions” as suggested by Barry Kemp in his study of New Kingdom simple burials. Changes could be observed in the positioning of the hands in burials during the Late to Ptolemaic Period, from hands on the pelvis to being crossed on the chest. Examination of the burial method also revealed slight socio-economic differences between people buried in this cemetery.

Key-words: Ancient Egypt, simple burials, Late Period, Ptolemaic Period

はじめに

古代エジプトでは、王墓や高官墓に見られるような岩窟墓や神殿型平地墓などの他に、土坑や砂上に直接埋葬され、副葬品の少ない簡素な埋葬がある。これらは、単純埋葬 (Simple burial)、表層埋葬 (Surface burial/Surface grave) や土坑墓 (Pit grave) などと呼ばれ、一般的に階層の低い人々の埋葬として考えられている。これらは定まった呼称はないが、本稿では便宜的に Simple burial を日本語に訳し、「単純埋葬」と呼ぶこととする。

王墓や高官墓に関する研究のみでは、古代エジプトの社会全体の埋葬習慣を明らかにすることはできないため、こうした単純埋葬に関する研究は重要であると考えられるものの (cf. 和田 2008: 91)、これまで焦点を当てられることが少なく、盛んに研究が行われてこなかった (Baines and

Lacovara 2002: 12-14)。これまで関心を持たれてこなかった要因の一つとして、特定の区画における出土数は多いものの、共伴する副葬品が少なく、高官墓などに比べ、埋葬から得られる情報が少ないということが挙げられる。また、高官墓などの発掘調査の過程で副次的に調査が行われてきたということも言えるであろう (cf. 高橋 2008: 73; 周藤 2014: 22)。特に今回対象とする末期王朝時代やプトレマイオス朝時代の単純埋葬については、その下層に位置する古王国時代や新王国時代の墓が主な発掘対象であることが多く、研究対象として十分な注意が払われることが乏しかった。

これまで当該期の単純埋葬は主に以下の遺跡で確認されている。デルタ地域のクエスナ (Quesna) 遺跡 (Rowland 2008; Rowland et al. 2010)、アブ・シール (Abusir)

遺跡のプタハシェプセスのmastaba墓周辺 (Strouhal and Bareš 1993)、ニウセルラー王の葬祭殿周辺 (Smoláriková 2000)、北サッカラ (North Saqqara) 遺跡のC地区 (河合ほか 2018)、サッカラ (Saqqara) 遺跡のジェセル王の階段ピラミッド西側 (Myśliwiec ed. 2008)、アクトヘテブのmastaba墓周辺 (Janot et al. 2001; Ziegler and Bridon-neau 2006)、大周壁周辺 (Mathieson et al. 1997)、テティ王ピラミッド北側 (Quibell and Hayter 1927)、アスビエイオン (Giddy 1992)、セラベウム参道周辺 (Smith 1982)、ファイユーム地域のファグ・エル＝ジャムース (Fag el-Gamous) 遺跡 (Evans et al. 2015)、アビュドス (Abydos) 遺跡 (Landvatter 2013)、西部砂漠のカルガ・オアシス (Kharga Oasis) (Ibrahim et al. 2008)、ダクラ・オアシス (Dakhleh Oasis) (Dupras et al. 2016) などである。このようにエジプト各地で出土が確認されているが、後に述べるように、これまで研究の対象となることがなく、全体的にどのような特徴があるのかという基本的な部分についても不明瞭な点が多い。また、プトレマイオス朝時代は、これまで、文字資料を中心に研究が行われており、近年、考古資料からプトレマイオス朝時代の研究が求められている (周藤 2014: 21)。こうした点からも単純埋葬の研究が必要と考えられる。

更に、本稿で対象とするサッカラ遺跡は、古代エジプトの中心地であったメンフィス (Memphis) の墓域の一部であり、初期王朝時代から中心的な墓地として利用されていた。末期王朝時代になると、サッカラ遺跡において、埋葬にギリシャの影響が見られるようになる。エジプトでは、紀元前7世紀以降、ギリシャをはじめとする東地中海世界との交流が活発になり、特に末期王朝時代の中心地であったメンフィスでは、カリア人などの外国人がエジプトの埋葬習慣を受け入れて埋葬されている例が多く知られている。例えば、メンフィスの主要な墓地であったサッカラ遺跡からは、墓に奉納された紀元前6世紀の石碑が発見されており (Höckmann 2001)、そこにはエジプトの図像とギリシャの図像の両方が見られる。更に当該期は、動物信仰が盛んになり、サッカラ遺跡に動物墓地が形成されるようになる。その動物信仰の中心であったアピス牛が埋納されている宗教施設のセラベウムでも、ギリシャの影響を受けている石碑が数多く奉納されている。一方で、動物墓地の埋葬はミイラ処理されており、エジプトの文化も見られる。このように当該期のサッカラ遺跡は、ギリシャの文化とエジプトの文化が共存していたと指摘されている (Radomska 2012: 354)。このような文化の共存が、簡素な埋葬にも見られるのかどうかについても注目される。

こうした状況を踏まえ、本稿では、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の埋葬習慣に関する研究の第一歩とし

て、まずは比較的まとまって出土し、かつ詳細な報告がされているサッカラ遺跡のジェセル王階段ピラミッド西側から発見された当該期の単純埋葬を対象に分析を行い、当時の単純埋葬の特徴について示してみたい。

1. 先行研究

古代エジプトにおける単純埋葬の研究としては、これまで主に新王国時代の単純埋葬を対象に実施されてきた。例えば、B. J. ケンプ (Kemp) はアマルナ (Amarna) 遺跡の集落墓地の単純埋葬の頭位方向の分析を行っている (Kemp 2007)。アマルナ遺跡の単純埋葬では、新王国時代の主流と考えられてきた西向きの頭位とは別の頭位を指向しており、北東方向と北西方向に2分されている。これは小規模な社会集団 (おそらく個別の家族) によって継承されていた「小さな伝統 (mini-traditions)」に由来するもので、単純埋葬のような簡素な埋葬の被葬者は、高位の人々の中で一般的であった伝統に従っていなかったのではないかと指摘している (Kemp 2007: 29)。

ケンプの分析結果に追加する形で、和田浩一郎氏は新王国時代の単純埋葬の研究を行っている (和田 2008)。5つの新王国時代の墓地遺跡 (ダハシュール (Dahshur) 北遺跡、サッカラ遺跡、ザウィヤト・アル＝アリアーン (Zawiyet el-Aryan) 遺跡、マディーナト・グラープ (Medinet Ghurab) 遺跡、シドマント (Sidmant) 遺跡) を対象とし、土坑墓埋葬の頭位方向についての分析を行い、王墓に見られる頭位方向と比べ、より多様性に富む傾向を指摘している。新王国時代に一般的とされる西側を向く頭位が主流であるものの、それ以外にも南、北、東側に頭位を向ける埋葬が見られ、ケンプが指摘した「小さな伝統」が、アマルナ遺跡だけでなく各地で存在していたと述べている (和田 2008: 103-106)。その他、和田氏は、新王国時代のコム・マディーナト・グラープ (Kom Medinet Ghurab) 遺跡の単純埋葬を対象に、被葬者の社会経済的差異を、墓の形態、副葬品の価値から明らかにする研究を行っている。分析の結果、墓の形態によって造営地に差異があることや、副葬品の価値から、差はそれほど明瞭ではないものの、上下2つの社会経済的グループが存在することを示している。また、墓地間においても、中央と地方で差異があることも明らかとなっている (和田 2002)。

本稿で分析の対象とする末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬については、サッカラ遺跡のジェセル王の階段ピラミッド西側から出土した子供の単純埋葬を対象とした研究が、発掘者の一人である M. ラドムスカ (Radomska) によって行われている (Radomska 2016)。研究の結果、子供の埋葬に特徴的な副葬品や年齢により副葬品の内容も変化 (0-3歳では腕輪、貝、護符、4-7歳では

イヤリング) することが示されている。それ以外については、大人の埋葬と大きな差異はなく、特に子供のみがまとめて埋葬されることもない点を示している (Radomska 2016: 182-183)。ラドムスカの研究は、子供の単純埋葬を中心としており、大人も含めた墓地全体の単純埋葬の分析は行っていない。また、ジェセル王の階段ピラミッド西側の単純埋葬の報告の中でも、特に分析は行っておらず、全体的な傾向については触れられていない。

このような先行研究のもと、筆者は本稿において、サッカー遺跡のジェセル王の階段ピラミッド西側から出土した単純埋葬を対象とし、分析を行っていく。

2. 分析対象資料と分析方法

本稿で分析対象とするサッカー遺跡の古王国時代第3王朝のジェセル王の階段ピラミッドの周囲には、巨大な「空堀」が掘られており、古王国時代第6王朝を中心に、その「空堀」を再利用する形で、岩窟墓が築かれている。更に後世になって、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に、この地区が埋葬場所として利用されている。1987年より、ポーランド隊がこれらの岩窟墓を対象に発掘調査を行っており、その発掘調査の過程で、上層から単純埋葬が発見されている (Myśliwiec ed. 2008: 11-14)。これまで古王国時代第6王朝から第1中間期に年代付けられる単純埋葬および末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代付けられる394基(508体)の単純埋葬が報告されている (Myśliwiec ed. 2008: 29)。本稿では、これらの中でも、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代付けられ、かつ「未盗掘」と報告された112基(133体)の単純埋葬を対象とし分析を行う。なお、調査区はSectorと呼称され、1から5までがあり(図1)、本稿でもこの呼称に従う (Myśliwiec ed. 2008: 30-31)。

階段ピラミッド西側から出土した当該期の単純埋葬の概要について述べると、ミイラ処理のされている埋葬もあれば(図2. (a))、ミイラ処理のされていない埋葬(図2. (b))、木棺に納められている埋葬(図2. (c))、陶棺に納められている埋葬(図2. (d))、土坑に納められている埋葬(図2. (e))、カルトナージュが付属している埋葬(図2. (f))、アミュレットなどの副葬品(図2. (g), (h), (i))を持つ埋葬など多種多様の単純埋葬で構成されている。また、古王国時代末から第1中間期初期の埋葬は単葬墓のみに対し、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の埋葬では単葬墓に加え合葬墓も見られる。合葬墓は、2~4体の埋葬が組み合わさっており、男女の埋葬、大人と子供の組み合わせの埋葬、同じ年代の子供同士の埋葬などさまざまである (Myśliwiec ed. 2008: 457-458)。

本稿では、以上の資料を対象とし、A. 埋葬の軸線・頭

位方向、B. 埋葬姿勢、C. 埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係、D. 埋葬方法、E. 副葬品の分析を行う。なお、分析を行なう際に、合葬墓で報告されている埋葬で、1体のみが未盗掘として報告されている場合は、今回は単葬墓として扱った。また、合葬墓における副葬品は各々の副葬品が実際にどの埋葬に由来するものであるのか判断が困難であるため、1基における副葬品として分析に加えた。

3. 分析および考察

表1.1~1.4を参照しながら、先述した5つの項目に関して分析を行ない、項目ごとに考察を示したい。

A. 埋葬の軸線・頭位方向

(1) 埋葬の軸線の分析 (図3)

Aの分析では、埋葬の軸線と頭位方向を2つに分けてそれぞれ見ていきたい。まず埋葬の軸線の傾向であるが、新王国時代以降、一般的に広く採用されてきた「東西軸」¹⁾の埋葬が108体(81%)確認できる。続いて「南北軸」の埋葬が22体(16%)見られ、少数ではあるものの「北西 - 南東軸」の埋葬が2体(2%)、「南西 - 北東軸」の埋葬が1体(1%)確認されている。大多数の埋葬が「東西軸」を採用した埋葬であるという傾向が得られた。

(2) 頭位方向の分析 (図4)

頭位方向は「西向き」の埋葬が99体(74%)確認された。その他、「南向き」が14体(10%)、「東向き」の埋葬が9体(7%)、「北向き」が8体(6%)、「北西向き」が2体(2%)、「南西向き」が1体(1%)確認された。「西向き」の埋葬が主流であり、若干数ではあるが、続いて「南向き」の頭位の割合が高い。また、「南向き」の頭位の埋葬に関しては、14体中10体が調査区のSector1に集中するという傾向も得られた。

(3) 埋葬の軸線および頭位方向の考察

古代エジプトの埋葬の向きについてまとめたM. J. ラーフェン (Raven) によれば、西向きの頭位は、埋葬姿勢が側臥位屈葬から仰臥位伸展葬へ変化したことに伴って、新王国時代以降、一般的に見られるようになった頭位方向とされる。同じく、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代でも西向きの頭位が主流であると述べられている (Raven 2005: 40)。そして、この主流に従わない軸線、頭位方向については、それぞれの地域、場所の状況によって説明されると考えられてきた。例えば、ナイル川の流路の方向に影響される、あるいは周囲に高官墓がある場合には、それに影響される、あるいは単なる不注意の場合もある、など

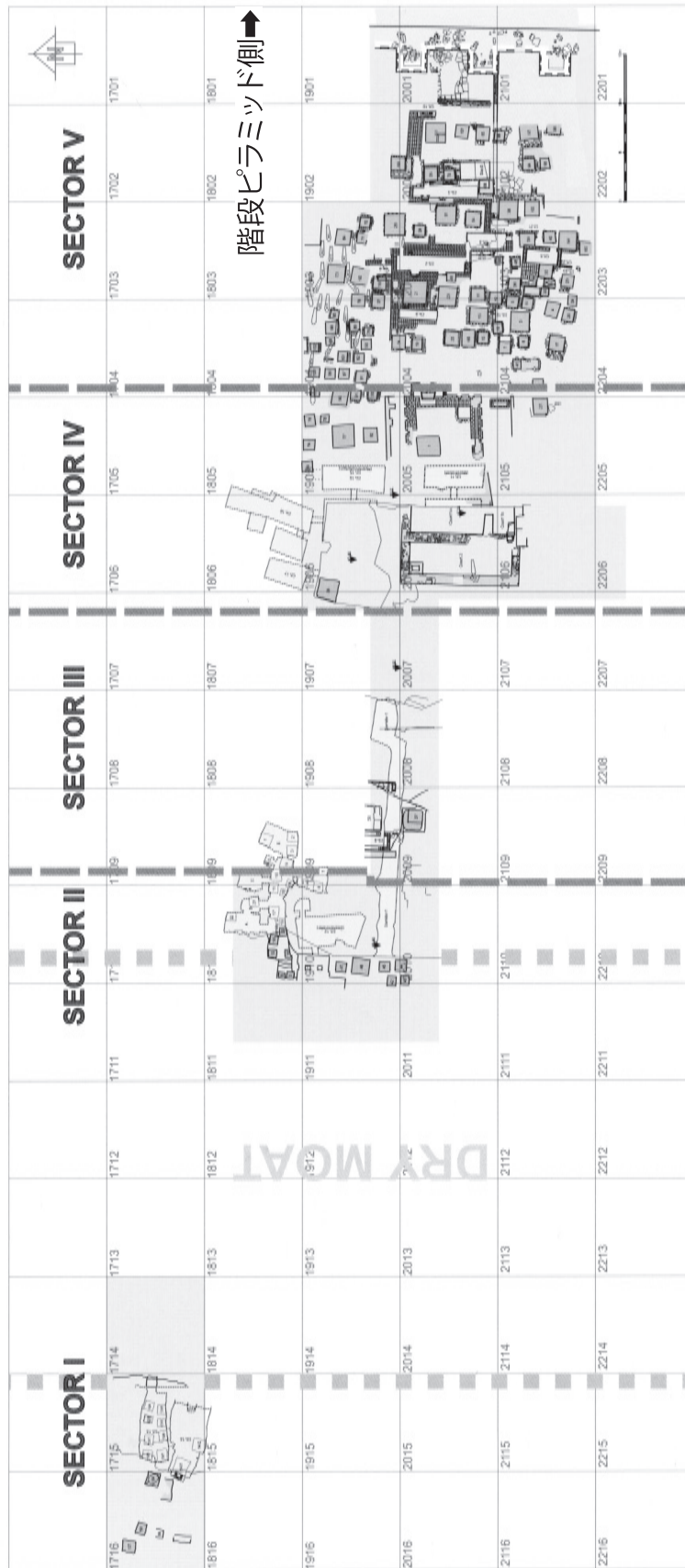
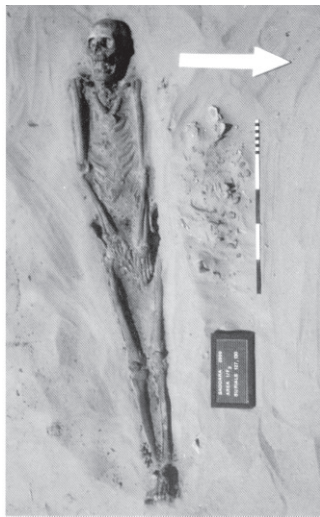


図1 ジェゼル王階段ピラミッド西側発掘区 (Mysliwiec ed. 2008; Fig. 1 に一部加筆)



(a) ミイラ処理なし



(b) ミイラ処理あり



(c) 木棺



(d) 陶棺



(e) 土坑



(f) カルトナーージュ



(g) ヒビのアミュレット



(h) リース



(i) ブロンズ製の腕輪

図2 埋葬の種類 (Myśliwiec ed. 2008: Pls. LIV. c, LVII. b, LXII. d, CIV. c, CLXII. b, CXCIII. c, CCII. a, b, CCXX. B. 縮尺不同)

表 1.1 分析の対象とする単純埋葬一覧 (Sector 1)

Sector	Burial No.	大人/子供	頭位	埋葬姿勢 (手)	埋葬方法	ミイラ処理	副葬品
1	1A		西			あり	木棺
	254	子供	南	骨盤		あり	
	269		南			あり	彩色木棺 カルトナージュ
	274	女	西	交差		あり	
	282	子供	南西	骨盤		あり	輸入土器 (末期) ファイアンス製品片 シャプティ片
	288		西			あり	ブロンズ製品片
	289		西			あり	
	314		西			あり	
	290	男	西	交差		あり	
	294		南	交差	周壁	あり	
	295	女	南			あり	木棺 カルトナージュ
	296	男	南	交差		あり	
	299	男	西	交差		あり	カルトナージュ片
	303	青年	西	骨盤		あり	
	304	男	西	骨盤		あり	土器 (末期~ブトレマイオス朝)
	305	女	南	骨盤		あり	
	308	女	西	骨盤		あり	
	310		西	骨盤		なし	
	313	男	西	交差		あり	木棺片
	317	男	西	骨盤		あり	
	320	子供	西	骨盤		あり	
	318	子供	西	腹部・骨盤		なし	
	324		西	交差		あり	木棺
	327	男	西	骨盤		あり	カルトナージュ片 (金)
	329	青年	南	骨盤		あり	銅製の耳飾り
	330		南	骨盤		あり	
	331		南	骨盤		あり	
	332	男	西	骨盤		あり	
	333		西			あり	カルトナージュ (金)
	334	女	西	交差		あり	
	335	男	南	骨盤		あり	彩色木棺
	338	子供	西	骨盤		なし	
	340		西	交差		あり	彩色木棺 カルトナージュ片 (金)
	341	男	西	交差		あり	彩色木棺 カルトナージュ片
343	男	西	交差		あり	カルトナージュ片 (金)	
345	女	西	骨盤		あり	彩色陶棺	
346	男	西	骨盤		あり	彩色陶棺	

表 1.2 分析の対象とする単純埋葬一覧 (Sector 2, 3)

Sector	Burial No.	大人/子供	頭位	埋葬姿勢 (手)	埋葬方法	ミイラ処理	副葬品
2	112	男	西			あり	
	113	女	西	骨盤		あり	
	115	男	西	骨盤		なし	
	116	乳児	西	骨盤		なし	
	119	男	西	交差		あり	
	120	女	西			あり	無彩色木棺
	121	青年	西	交差		あり	木棺片
	123		西	交差		あり	
	124	男	東	骨盤		あり	
	125	男	東			あり	
	127	男	西			なし	
	129	女	西	骨盤		あり	
	137	青年	西	交差		あり	
	138	男	北			あり	木棺片 カルトナージュ片
	140		北			あり	木棺片 カルトナージュ片
	148	男	北	交差		なし	
	149	女	北	交差		なし	
	151	男	西	骨盤		あり	木棺片
	160	男	西	骨盤		あり	
163	男	西	骨盤	土坑	あり		
3	75	男	南	胸・骨盤		あり	カルトナージュ
	76	男	北	交差		あり	カルトナージュ
	80	女	西	交差		あり	リース
	84	青年	東		周壁	あり	ファイアンス製のアミュレット (ヒヒ)
	85	子供	西		土坑	あり	
	87	女	西	骨盤		あり	
	88	男	西		土坑	あり	
	89	青年	西			あり	
	90	女	西		土坑	あり	
	99	乳児	西		土坑	あり	ブロンズ製の腕輪x2
	103	男	西	交差		あり	
	180	女	西	骨盤		あり	
	182	女	西	骨盤		あり	マット片
	185	子供	東	骨盤		あり	彩色木棺
	187	青年	西	骨盤		なし	
191	女	西	胸・骨盤		なし		
192	女	北西	胸・骨盤		なし		

と説明されている (Raven 2005: 40)。

今回対象とした単純埋葬においても、埋葬の軸線が「東西軸」であり、頭位方向が「西向き」の埋葬が大多数を占めており、ラーフェンの述べた主流に一致していた。こうした中で、「南北軸」の埋葬も見られた。

主流から外れた軸線に関する説明として、時期差の可能性とケンプが新王国時代の単純埋葬研究で指摘した「小さな伝統」(Kemp 2007: 29) が存在していた可能性の2つが考えられる。前者に関しては、デルタ地域のクエスナ遺跡のプトレマイオス朝時代からローマ支配期の埋葬におい

表 1.3 分析の対象とする単純埋葬一覧 (Sector 4)

Sector	Burial No.	大人/子供	頭位	埋葬姿勢 (手)	埋葬方法	ミイラ処理	副葬品
4	1	子供	西		土坑	あり	
	2	子供	西		土坑	あり	
	3		東			あり	土器および土器片 (末期)
	4		西		人型土坑	あり	カルトナーージュ (金) マット
	8		西		古王国の建造物を再利用した土坑	あり	リース布
	10		西	横		あり	植物製の棺 マット
	14	女	西	横		あり	
	25		西		土坑	あり	
	26		東		土坑	あり	
	29		西			あり	陶棺 カルトナーージュ (金)
	33	子供	西	骨盤		あり	
	205	女	西			あり	
	207	男	西	交差		あり	彩色木棺
	209	男	西			あり	
	355		西	骨盤		あり	彩色木棺
	357	女	西	横		あり	
	358	男	西			あり	
	359		西		周壁	あり	
	360	男	西	骨盤		あり	彩色木棺
	361	男	西	骨盤		あり	
363		東			あり	木棺 カルトナーージュ	
366	男	西			あり		
370		西			あり		
372	女	西	骨盤	土坑	あり		
422		北西			あり	カルトナーージュ片 バスケット×2 土器 (末期末)	
486	女	北	交差	古王国のシャフトの壁を穿った	あり	リース×2 布	
487	乳児	北	骨盤	壁龕	あり		
488	男	西	骨盤	人型土坑	あり		

て、「南北軸」が下層、「東西軸」が上層に位置するという傾向が報告されている (Rowland et al. 2010: 48)。また、単純埋葬ではないものの、末期王朝時代第26王朝のサッカー遺跡の大型シャフト墓では、南向きの頭位方向が特徴として挙げられている (Stammers 2010: 116) など、「南北軸の頭位が南」の埋葬に関しては、分析対象とする時代の中で、やや古い時期に見られ、時期差の可能性が考えられる。

ただし、後述するように埋葬の軸線および頭位方向と、

時期差による変化が考えられている埋葬姿勢との相関関係を見ると、より複雑な様相がうかがえ、時期差と判断するにはやや難しい。頭位方向の分析で示したように、「南向き」の頭位が Sector 1 にある程度まとまって出土していることから、現時点では時期差というよりは、「小さな伝統」が存在していた可能性を指摘してみたい。

表 1.4 分析の対象とする単純埋葬一覧 (Sector 5)

Sector	Burial No.	大人/子供	頭位	埋葬姿勢 (手)	埋葬方法	ミイラ処理	副葬品	
5	34	男	西		古王国の建造物の壁を再利用した 周壁	あり	リース×2 布	
	35	乳児	西			あり	ファイアンス製ビーズ×2	
	37	男	東			あり	カルトナージュ (金) 彩色木棺	
	41		西			あり		
	46	女	西			あり	リース	
	47	子供	西			あり		
	48	女	西			土坑	あり	
	51	男	西			土坑	あり	リース 布
	52		西			土坑	あり	
	53	子供	西			土坑	あり	彩色木棺
	58		西			土坑	あり	
	61	女	西	交差		周壁	あり	
	62	男	西	交差			あり	布
	73	子供	南			土坑	あり	
	74	男	西	骨盤		土坑	あり	彩色木棺
	197	女	南	胸・骨盤			あり	種子の入った布
	216	男	西	骨盤		周壁	あり	リース×2 布
	217	女	西	交差			あり	
	412	子供	西			古王国の建造物を再利用した 土坑	あり	
	415	乳児	南	骨盤			あり	アミュレット 布 玉ねぎ
	423	乳児	北				あり	
	418	乳児	東	横			あり	
	454	男	西	交差		人型土坑	あり	
	456	子供	西	交差		人型土坑	あり	
	469	男	西	交差		人型土坑	あり	
	474		西	骨盤		周壁	あり	布
482	男	西	骨盤		古王国のシャフトの壁を穿った 壁龕	あり		
483	男	西			古王国のシャフトの壁を穿った 壁龕	あり	カルトナージュ (金) 木製のカノボス箱 木製のプタハソカルオシリス神像	
494	女	西	骨盤		古王国の建造物の壁を穿った壁龕	あり	リース	
495	男	西	胸・骨盤			あり	リース 玉ねぎ	
508	男	西	交差			人型土坑	あり	カルトナージュ

※大人と子供の項目に関しては大人は性別、その他の埋葬は、性別問わず次の単語をそれぞれ訳した日本語を使用し明記。
infant:乳児 Child:子供 Juvenile:青年

B. 埋葬姿勢

(1) 埋葬姿勢の分析 (図 5, 6)

埋葬姿勢が確認できたのは、対象とした 133 体の中で 83 体であり、残りの 50 体については、全身が布で覆われているなど、埋葬姿勢は確認されていない。埋葬姿勢は、すべて仰臥位伸展葬であり、手の位置で大きく 2 分されるという結果が得られた。

古代エジプトの仰臥位伸展葬の埋葬で広く見られる「骨盤の上もしくは体の横に手を置く姿勢」が 48 体 (58%) 確認された (図 5. (a))。また、「手を胸の前で交差している姿勢」が 29 体 (35%) 見られ (図 5. (b))、この 2 つが大部分を占めている。その他、「片手が胸もしくは腹部・もう片方の手を骨盤に置く姿勢」が 6 体 (7%) (図 5. (c)) 確認された²⁾。

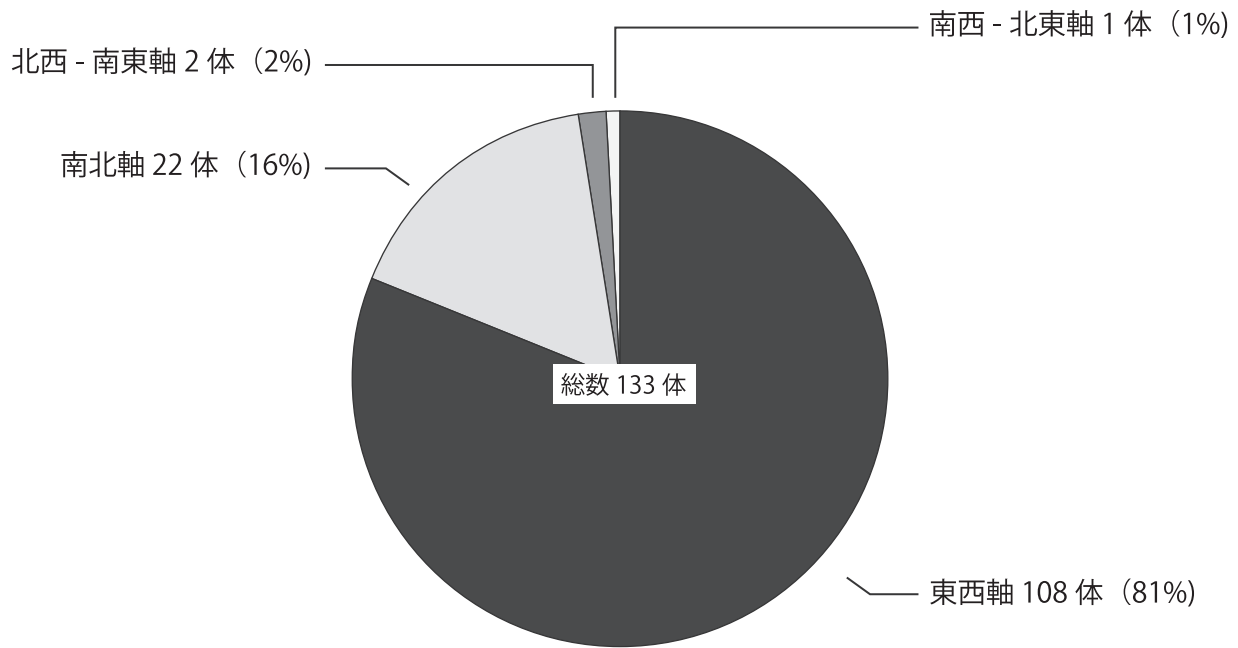


図3 軸線の割合

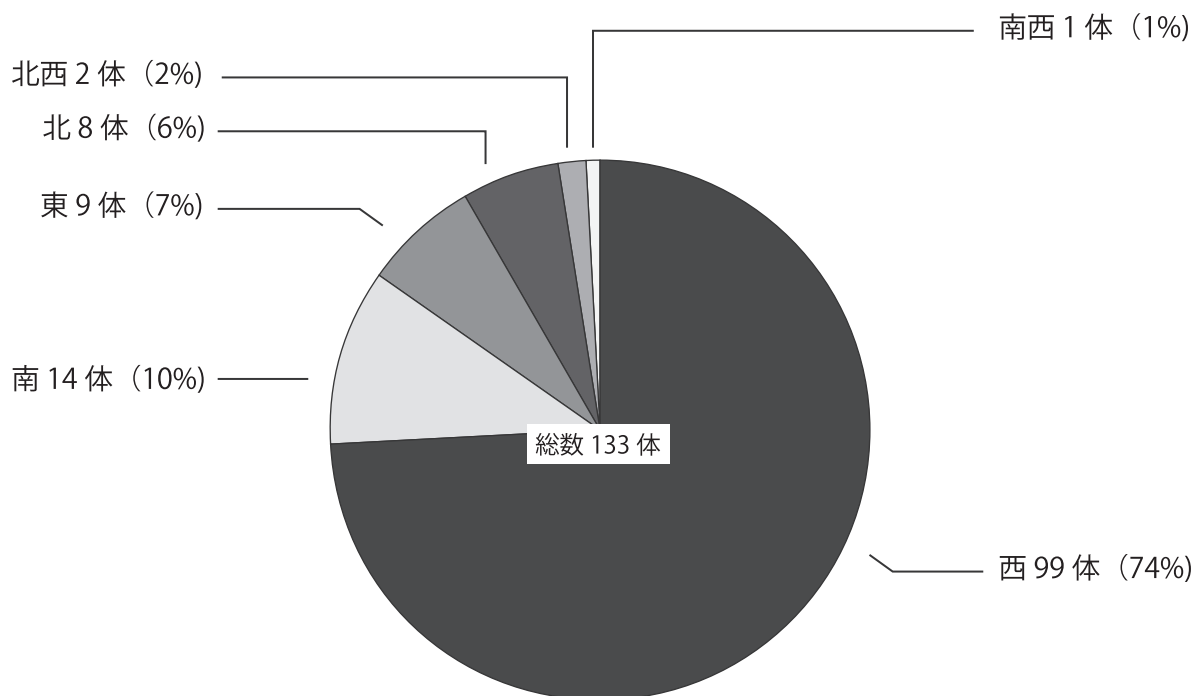
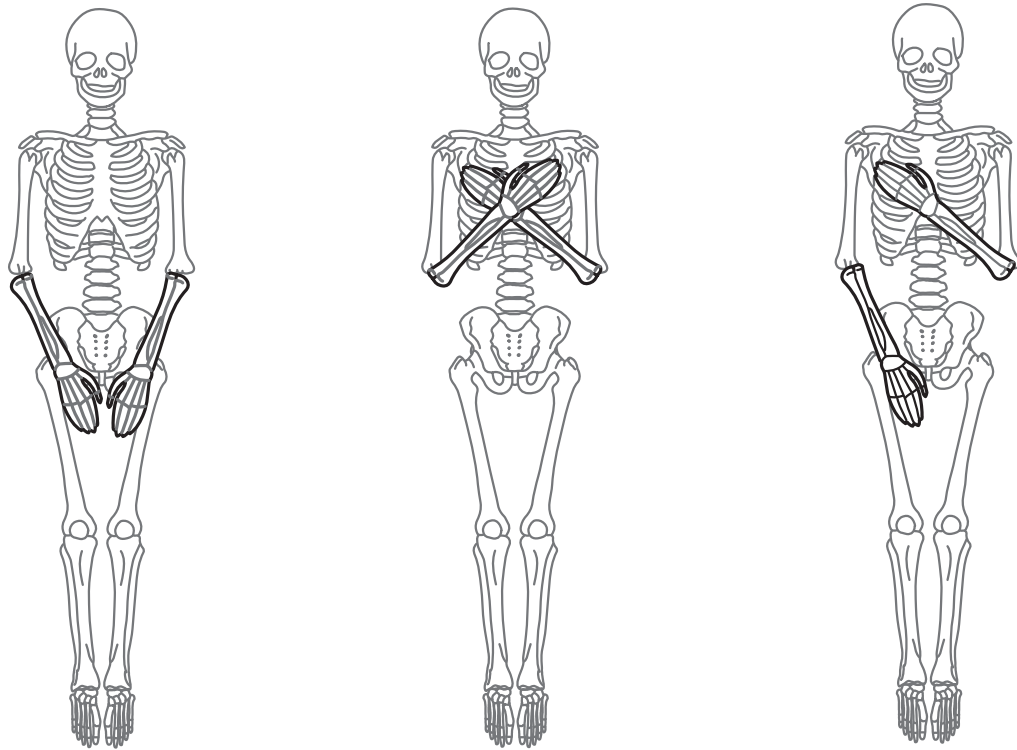


図4 頭位方向の割合

ここで、若干数ではあるが上下関係が報告されている埋葬の中で、「骨盤の上もしくは体の横に手を置く姿勢」が下層、「手を胸の前で交差している姿勢」が上層に位置する例が4例確認されている³⁾。こうした点から、「骨盤の上もしくは体の横に手を置く姿勢」から「手を胸の前で交差している姿勢」への移行があったと考えられる。

(2) 埋葬姿勢の考察

類似した手の位置の移行は、アクミム遺跡から出土した当該期のミイラのCTスキャン分析を行ったJ. エリアス(Elias)らによって指摘されており、末期王朝時代の埋葬は骨盤に手を置く姿勢が一般的であり、プトレマイオス朝時代になると胸元で交差する埋葬が増加するという分析結果を提示している(Elias et al. 2014: 58-59)。また、「手を



(a) 骨盤の上または横

(b) 胸の前で交差

(c) 胸元または腹部と骨盤の上

図5 埋葬姿勢模式図

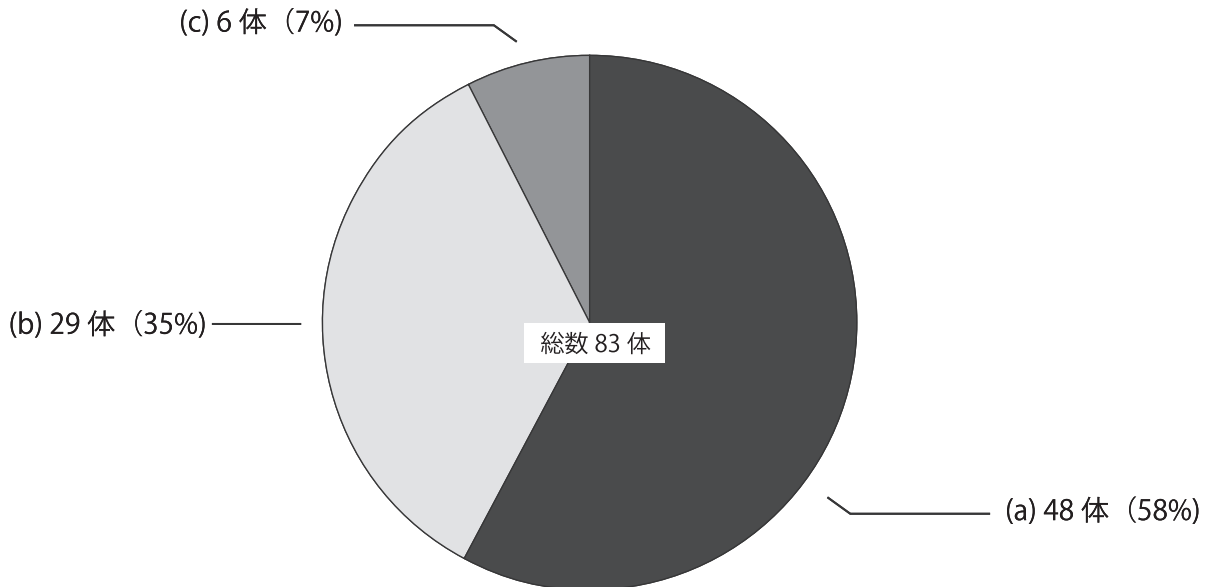


図6 埋葬姿勢の割合

胸の前で交差している姿勢」は、新王国時代以降の王または高官のミイラおよび棺の装飾に見られる埋葬姿勢である (Ikram 2003: 65)。当該遺跡において、「手を胸の前で交差している姿勢」が増加することは、以前は王や高官の埋葬だけであったものが、簡素な単純埋葬においても、導入

されるようになったという可能性が指摘できる。S. イクラム (Ikram) は、すでに末期王朝時代第26王朝の非エリートの埋葬で、手を交差させる埋葬が見られると述べており (Ikram 2003: 70)、エリアスらのミイラのCTスキャン結果と合わせて検討すると、末期王朝時代からプト

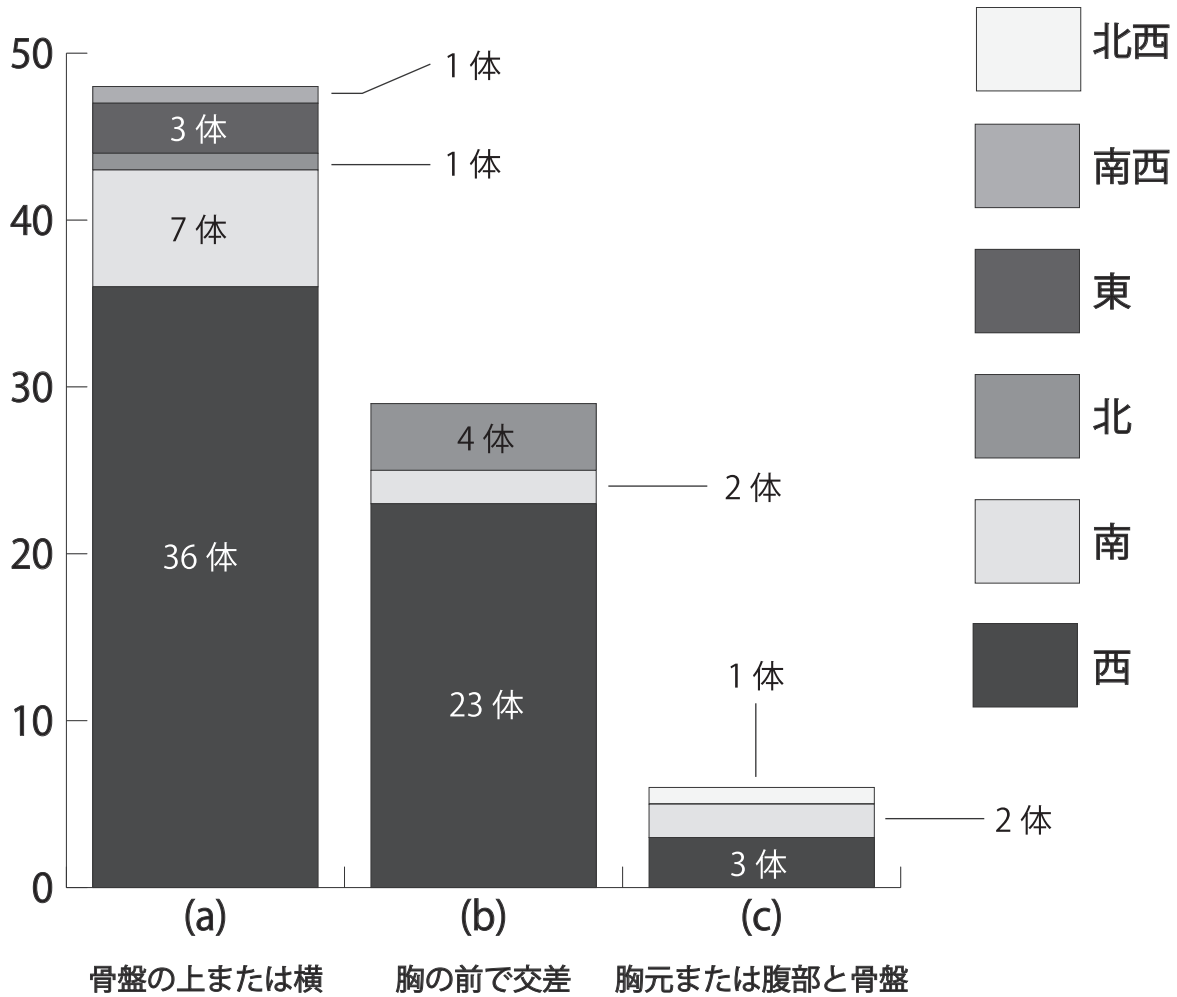


図7 埋葬姿勢および頭位方向の相関関係の割合

レマイオス朝時代にかけて、徐々に単純埋葬のような簡素な埋葬にも導入されてきた埋葬姿勢と考えられる。

C. 埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係

(1) 埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係の分析 (図7)

今回、分析対象とした133体の埋葬のうち、埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の双方が確認できる埋葬は83体である。埋葬の軸線・頭位方向については、時期差の可能性について判断を保留したが、埋葬姿勢の分析では、手の位置に関して時期差を指摘した。異なる判断をした両者にどのような関係があるのか、ここでは埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係を見てみたい⁴⁾。

まず、「(a) 骨盤の上もしくは体の横に手を置く姿勢」48体では、「西向き」の頭位が36体(75%)、「南向き」が7体(15%)、「東向き」が3体(6%)、「北向き」が1体(2%)、「南西向き」が1体(2%)確認された。続いて「(b) 手を胸の前で交差している姿勢」29体では、「西向

き」の頭位が23体(7%)、「北向き」の頭位が4体(14%)、「南向き」の頭位が2体(7%)確認された。最後に「(c) 片手が胸もしくは腹部・もう片方の手を骨盤に置く姿勢」6体では、「西向き」の頭位が3体(50%)、「南向き」の頭位が2体(33%)、「北西向き」の頭位が1体(17%)確認された。いずれの姿勢においても、「西向き」の頭位が主流であり、「南向き」、「北向き」がそれに続く結果となった。

(2) 埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係の考察

埋葬の軸線・頭位方向の分析・考察では、主流となる「西向き」の頭位方向の埋葬以外に、「南向き」の頭位方向の埋葬が存在する理由として、時期差と「小さな伝統」の可能性の2つを指摘し、現段階では、「小さな伝統」の可能性が高いと考えた。

ここで仮に、埋葬の軸線・頭位方向に時代による「南向き」から「西向き」への移行があるとし、そこに埋葬姿勢の移行を組み合わせると、「骨盤の上もしくは体の横に手

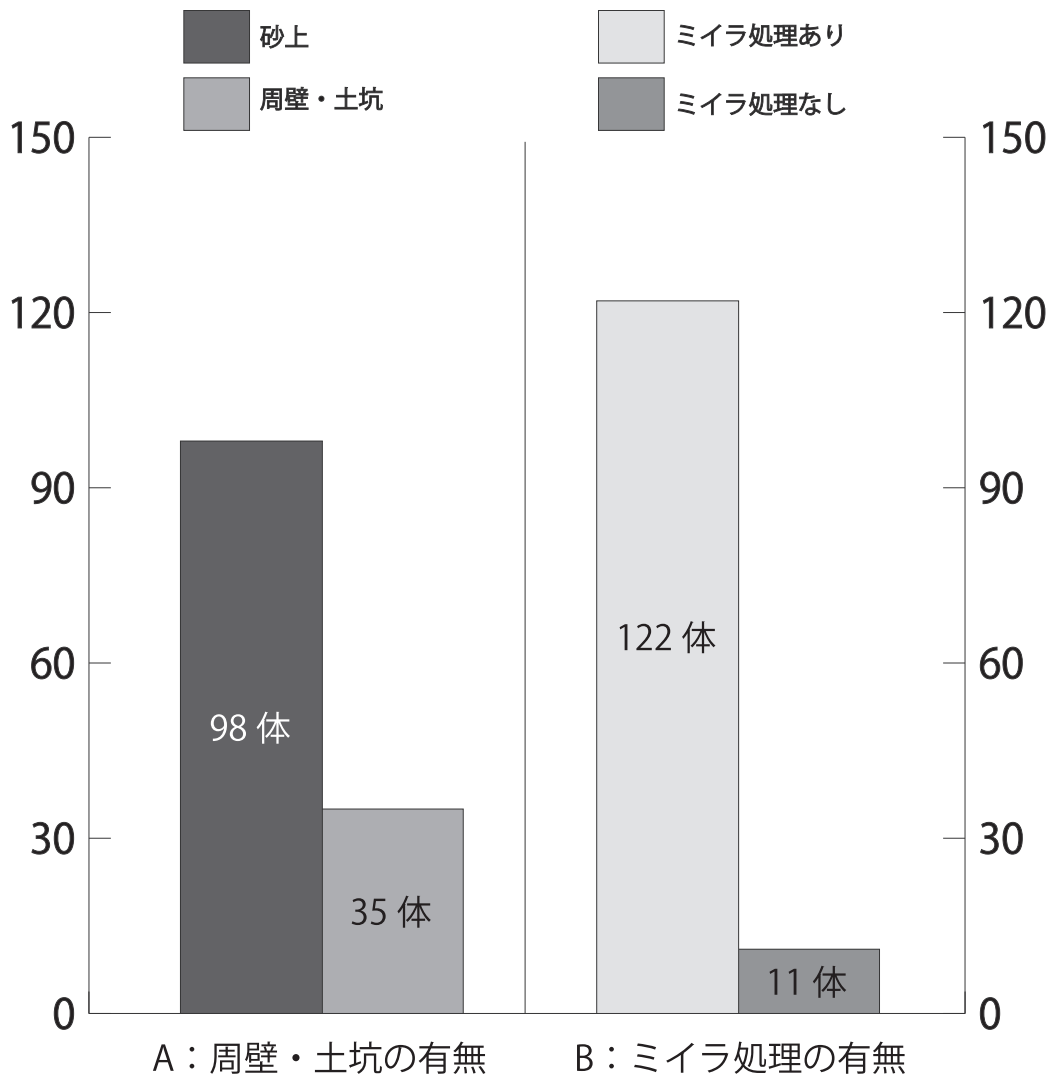


図8 埋葬方法に関する割合

を置く姿勢・南北軸（南向き）」から「手を胸の前で交差している姿勢・東西軸（西向き）」に移行するというような興味深い流れが考えられる。

ただし、相関関係の分析結果を見ると、新しい時期の「手を胸の前で交差している姿勢」では「南北軸（北向き）」の頭位方向がやや増加する傾向にあり、現時点では、一概に前述したような流れを指摘することが出来ない。现阶段では、時期差の可能性を提示するに留める。それぞれの埋葬姿勢の全体数にかなりの差があるので、今後は事例数を増やし、時期差に関しては慎重に検討していきたい。

D. 埋葬方法

(1) 埋葬方法の分析 (図8)

埋葬方法に関しては、大多数の98体（74%）が砂上に直接埋葬された状態で出土している⁵⁾。その他、石灰岩に

よる周壁や土坑を伴う埋葬が35体（26%）確認されている。後者の埋葬は、特に調査区のSector 4とSector 5で集中して確認される傾向にある。

また、埋葬方法として、ミイラ処理の有無についても触れてみたい。133体の埋葬のうち、122体（92%）がミイラ処理のされた埋葬として報告されている。ミイラ処理のされていない11体の埋葬については、調査区のSector 4とSector 5では見られず、Sector 1からSector 3までに見られる。Sector 1では36体中3体（8%）、Sector 2では20体中5体（25%）、Sector 3では17体中3体（17%）であり、調査区のSector 2とSector 3にやや集中する傾向にある。

(2) 埋葬方法の考察

分析では、石灰岩による周壁や土坑を伴う埋葬が調査区のSector 4とSector 5に集中するという傾向が見られ

た。調査区の Sector 4 と Sector 5 は、古王国時代のマスタバ墓やピラミッド周壁などの建造物が位置する場所であり、壁やシャフトを再利用することが出来た場所である。直接砂上に埋葬するよりも僅かながら労力がかかっており、当該地区のランドマークともいえる古王国時代の階段ピラミッドに近い場所であることから、調査区の Sector 4 と Sector 5 の埋葬の被葬者は、若干の経済的優位にあったのかもしれない。

ミイラ処理に関しては、プトレマイオス朝時代、宗教的な中心地であるメンフィス地域ではミイラ処理に従事していた人々も多かったとされる。また、ミイラ処理で使用する香油や没薬などの材料は、ほとんどが輸入品であり、シリアやアラビア半島から輸入されていたとされており、輸入品で行うミイラ処理は、コストがかかっていたと指摘されている (Tompson 1988: 73)。調査区の Sector 4 と Sector 5 ではすべての埋葬がミイラ処理されており、ミイラ処理されていない埋葬が調査区の Sector 2 と Sector 3 にやや集中する傾向にあったことから、この点からも調査区の Sector 4 と Sector 5 の埋葬の被葬者は、若干の経済的優位にあった点を指摘できる。

E. 副葬品

(1) 副葬品の分析

副葬品を持つ埋葬は 112 基中 55 基 (49%) で確認された。内容としては、木棺、カルトナーージュ、土器、ファイアンス製のアミュレットおよびビーズ、シャブティ、ブロンズ製や銅製の装飾品、マット、玉ねぎ、カノボス箱、プタハーソカル-オシリス神像、種子、布、リースで構成されている。これらを複数所持する埋葬は少ない。また、11 基中 5 基の埋葬で布とリースがセットで副葬される傾向にあり、11 基中 8 基と若干数ではあるが、布とリースがセットもしくは 1 点ずつ副葬されている埋葬が階段ピラミッドに近い調査区の Sector 5 に集中する傾向にある。

(2) 副葬品の考察

副葬品のほとんどは、古代エジプトでこれまで見られてきた伝統的な副葬品であるが、例外としてリースが挙げられる。リースは死者の書との関係が示唆されている一方で (Radomska 2016: 178-179)、プトレマイオス朝時代の埋葬研究を行なっている T. P. ランドバッター (Landvatter) は、デルタ地域で出土したリースに関して、ギリシャ・マケドニア方面から導入された文化であると言及している (Landvatter 2013: 77)。リースの出土例のみで、ギリシャ・マケドニアからの影響が単純埋葬にも見られるとは言い難い。ただし、サッカラ遺跡では、末期王朝時代からギリシャの影響を受けた奉納石碑などが見られるようにな

るといふ事例もあることから (e.g. EA 67235; Parkinson 1999: Fig. 71)、単純埋葬も同様の影響を受けていた可能性があることも捨てきれない。

おわりに

本稿では、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬について、エジプト各地で出土している資料の中でも、詳細な報告がされているサッカラ遺跡のジェセル王階段ピラミッド西側から出土した当該期の単純埋葬を対象とし分析を行った。階段ピラミッド西側を発掘したポーランド隊の報告書では、埋葬ごとの詳細を記述するにとどまっておらず、頭位方向や、埋葬姿勢に関して分析を行っていなかった。そこで本稿では、先述してきた分析を行い、当該期における単純埋葬の基本的な特徴を明らかにした。ここで、本稿における分析と考察で明らかになったことを要約し結びとしたい。

埋葬の軸線と頭位方向、埋葬姿勢の分析を行ったところ、頭位方向では大多数の埋葬が「西向き」の頭位を指向しているという結果が得られた。それ以外に、「南向き」の頭位の埋葬も見られた。埋葬姿勢に関しては、若干数ではあるが「骨盤の上もしくは体の横に手を置く姿勢」から「手を胸の前で交差している姿勢」への移行を分析から見ることができ、類似した傾向が他の研究でも指摘されていることから、実際に時代による埋葬姿勢の移行があったと考えた。「手を胸の前で交差している姿勢」は、王や高官によく見られる埋葬姿勢であり、それが当該期では次第に単純埋葬のような簡素な埋葬にまで導入されるようになったと考えられる。また、埋葬方法の分析と考察では、場所によって被葬者の若干の経済的差異を見ることができた。

本稿では、幅広い年代で「ジェセル王階段ピラミッド西側」という非常に狭い領域の資料のみを対象とし分析を行った。長い年月の埋葬習慣をこれだけで明らかにすることができるとは考えられず、今後は、事例を増やし、分析を積み重ねていくことで、最終的にエジプト全体や地域的な当該期の埋葬の変容について、社会的な背景も交えながら明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

本稿は第 36 回日本エジプト学会で発表した内容をまとめ直したものである。本稿を草するにあたり、東日本国際大学・吉村作治学長、早稲田大学・近藤二郎教授、金沢大学・河合望准教授には現地調査の機会を頂き、問題認識のきっかけを与えて頂きました。鶴見大学・宗基秀明教授には日頃より数々のご教示を頂きました。ならびに査読者の先生からも貴重なご意見を賜りました。末筆ながらここに記して、感謝致します。

註

- 1) 古代エジプトにおける埋葬の軸線、頭位方向の概要については、Raven 2005 を参照。主に新王国時代までは、「南北軸」であるのに対して、新王国時代以降は、「東西軸」が主流となっている。
- 2) 胸元と骨盤のそれぞれに手を置く姿勢は、特に新王国時代の王族の女性のミイラ (Elias et al. 2014: 50) や日常の姿を表現していると考えられている女性の棺の装飾に見られてきた (Ikram and Dodson 1998: 225)。一方で、当該遺跡で出土している埋葬では、女性だけでなく男性の例も確認され、新王国時代とは異なる意味合いを持っていたと考えられる。
- 3) 次に示すように、上層と下層で埋葬姿勢が異なる例が 4 例確認されている。「上層：123 (交差)、下層：124・125 (骨盤・不明)」、「上層：148・149 (交差・交差)、下層：151 (骨盤)」、「上層：294 (交差)、下層：305 (骨盤)」、「上層：343 (交差)、下層：345 (骨盤)、346 (骨盤)」。
- 4) 「C. 埋葬の軸線・頭位方向と埋葬姿勢の相関関係」の分析では、埋葬姿勢ごとに 100% と換算し割合を示している。
- 5) 埋葬当時は、砂上ではなく砂を掘り込むなどして埋葬を行ったと考えられるが、砂に掘り込みを造っていたため、発掘では明確な穴として確認されず、砂上に直接埋葬されている様な状態であると考えられる。

参考文献

Baines, J. and P. Lacovara 2002 Burial and the Dead in Ancient Egyptian Society. *Journal of Social Archaeology* 2: 5-36.

Dupras, T. L., L. J. Williams, M. S. Wheeler and P. G. Sheldrick 2016 Life and Death in the Desert: A Bioarchaeological Study of Human Remains from the Dakhleh Oasis, Egypt. In C. Price, R. Forshaw, A. Chamberlain and P. Nicholson (eds.), *Mummies, Magic and Medicine in Ancient Egypt: Multidisciplinary Essays for Rosalie David*, 286-304. Oxford, Oxford University Press.

Elias, J., C. Lupton and A. Klaes 2014 Assessment of Arm Arrangements of Egyptian Mummies in Light of Recent CT Studies. *Yearbook of Mummy Studies* 2: 49-62.

Evans, R. P., M. W. David and M. Kerry 2015 Rethinking Burial Dates at a Graeco-Roman Cemetery: Fag el-Gamous, Fayoum, Egypt. *Journal of Archaeological Science, Reports* 2: 209-214.

Giddy, L. L. 1992 *The Anubieion at Saqqara II: the Cemeteries*. London, Egypt Exploration Society.

Grajetzki, W. 2003 *Burial Customs in Ancient Egypt: Life in Death for Rich and Poor*. London, Duckworth.

Höckmann, U. 2001 "Bilinguen" : Zu Ikonographie und Stil der karisch-ägyptischen Grabstelen des 6. Jhs. v. Chr. In U. Höckmann and D. Kreikenbom (eds.), *Naukratis: die Beziehungen zu Ostgriechenland, Ägypten und Zypern in archaischer Zeit. Akten der Table Ronde in Mainz, 25.-27. November 1999*, 217-232. Möhnese, Bibliopolis.

Ibrahim, B. A., F. Dunand, J.-L. Heim, R. Lichtenberg and M. Hussein 2008 *Le Matériel Archéologique et les Restes Humains de la Nécropole d'Ain el-Labakha (Oasis de Kharga)*. Paris, Editions Cybèle.

Ikram, S. and A. Dodson 1998 *Mummy in Ancient Egypt: Equipping the Dead for Eternity*. London, Thames & Hudson.

Ikram, S. 2003 *Death and Burial in Ancient Egypt*. Cairo, The American University in Cairo Press.

Janot F., G. Bridonneau, M.-F. de Rozières, L. Cotellet-Michel, C. Décamps 2001 La Mission Archéologique du Musée du Louvre à Saqqara: Une

Nécropole d'Époque Tardive dans le Secteur du Mastaba d'Akhetetep. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 101: 249-291.

Kemp, B. J. 2007 The Orientation of Burials at Tell el-Amarna. In Z. Hawass and J. Richards (eds.), *The Archaeology and Art of Ancient Egypt: Essays in Honour of David B. O'Connor*, 21-31. Cairo, Supreme Council of Antiquities.

Landvatter, T. P. 2013 *Identity, Burial Practice, and Social Change in Ptolemaic Egypt*. Ph.D. dissertation of University of Michigan, University of Michigan.

Mathieson, I., E. Bettles, J. Clarke, C. Duhig, S. Ikram, L. Maguire, S. Quie and A. Tavares 1997 The National Museums of Scotland Saqqara Survey Project 1993-1995. *The Journal of Egyptian Archaeology* 83: 17-33.

Myśliwiec, K. (ed.) 2008 *Saqqara III: The Upper Necropolis*. Warszawa, Polish Academy of Sciences.

Parkinson, R. 1999 *Cracking Codes: The Rosetta Stone and Decipherment*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press.

Quibell, J. E. and A. G. K. Hayter 1927 *Excavations at Saqqara Teti Pyramid, North Side*. Cairo, Institut Français d'Archéologie Orientale.

Radomska, M. 2012 Some Remarks on Historical Topography of Saqqara in the Ptolemaic Period. *Études et Travaux* 25: 339-355.

Radomska, M. 2016 Child Burials at Saqqara: Ptolemaic Necropolis West of the Step Pyramid. *Études et Travaux* 29: 169-202.

Raven, M. J. 2005 Egyptian Concepts on the Orientation of the Human Body. *The Journal of Egyptian Archaeology* 91: 37-53.

Rowland, J. 2008 The Ptolemaic-Roman Cemetery at the Quesna Archaeological Area. *The Journal of Egyptian Archaeology* 94: 69-93.

Rowland, J., S. Inskip and S. R. Zakrzewski 2010 The Ptolemaic-Roman Cemetery at the Quesna Archaeological Area. *The Journal of Egyptian Archaeology* 96: 31-48.

Smith, H. S. 1982 The Excavation of the Anubieion at Saqqara: A Contribution to Memphite Topography and Stratigraphy (from 400 BC-641 AD). *L'Égyptologie en 1979: axes prioritaires de recherches, Part 1*: 279-282.

Smoláriková, K. 2000 The Greek Cemetery in Abusir. In M. Bárta and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, 67-72, Prague, Academy of Sciences of the Czech Republic, Oriental Institute.

Stammers, M. 2010 *Late Period Egyptian Tombs: The Non-Royal Egyptian Tomb of the Late Period*. Saarbrücken, Lambert Academic Publishing.

Strouhal, E. and L. Bareš 1993 *Secondary Cemetery in the Mastaba of Ptahshepses at Abusir*. Prague, Charles University.

Thompson, D. J. 1988 *Memphis Under the Ptolemies*. Princeton, Princeton University Press.

Wada, K. 2007 Regional Society and Cemetery Organization in New Kingdom Egypt. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 36: 347-389.

Ziegler, C. and C. Bridonneau 2006 A New Necropolis in Saqqara. In M. Bárta, F. Coppens and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2005: Proceedings of the Conference Held in Prague (June 27-July 5, 2005)*, 57-73. Prague, Czech Institute of Egyptology, Charles University in Prague.

河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 2018 「第3次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」『エジプト学研究』24号 82-112頁。

周藤芳幸 2014 『ナイル世界のヘレニズム：エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会。

高橋寿光 2002 「新王国時代の単純埋葬について」『エジプト学研

究』10号 72-85頁。

高橋亮介 2004 「プトレマイオス朝エジプト研究の新動向—J. Manning, *Land and Power in Ptolemaic Egypt* の到達点—」『オリエント』47巻1号 148-159頁。

和田浩一郎 2002 「コム・マディーナト・グラープの墓地に関する一考察」『西アジア考古学』3号 91-103頁。

和田浩一郎 2008 「古代エジプト・新王国時代の土坑墓埋葬における頭位方向について」『オリエント』51巻1号 87-109頁。

米山 由夏

鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

Yuka YONEYAMA

Graduate School of Literature, Tsurumi University